

## 四部・四阿舍における 四念処について

安藤 正見

〔一〕（本稿の意図） 原始仏教聖典に見られる sati（念）は，*jhāna*（禪）や *saṃādhi*（定）などとともに禪定思想をあらわす重要な術語の一つである。四部・四阿舍の散文部に説かれている禪定思想の多くは、これらの術語に関して体系化された形で説かれている。sati に関する教説としては「四念処」（*cattāro satipaṭṭhānā*）があげられる。

パーリ四部・漢訳四阿舍に説かれている四念処の教説は、「念処」（*satipaṭṭhāna*）の名を冠する『長部・念処経』（DN. Vol. II, pp. 290-315）や『中部・念処経』（MN. Vol. I, pp. 55-63）をはじめ、多くの經典に述べられている。これらの經典の中『相應部・念処相應』（*Satipaṭṭhāna-samyutta*; SN. Vol. V, pp. 141-192）に説かれている四念処の教説は、その前後関係から見ておよそ、①一乗道②正念③善聚（五蓋煩惱を不善聚、これを断ずる四念処を善聚とする）④自灯明自帰依・法灯明法帰依と結びつけて説かれる四つの形に分けることができよう。ここには四念処の教説が、如何なる教理と関わって説かれているかを知ることができる。かつまたこの四種の教理は、ある程度新古の前後関係を設定できる手がかりを、もっているように思われる。今はこの点を①と④について述べ

てみたい。

〔二〕（四念処の性格） まず最初に四念処の性格を『中部・念処経』より見てみたい。この經典では四念処修習の目的を、有情の浄化、憂悲の超克、苦惱の滅、正理の証得、涅槃の作証の五項目としており、『長部・念処経』でも同様である。これらの中「苦惱の滅」（*dukkhadomassanaṃ atthagamaṃ*）と「涅槃の作証」（*nibbāna-sa sacchikīrā*）の二項目は、『念処相應』でも説かれている。すなわち苦惱の滅は「もし四念処を得ることある者は、正しく苦尽に至る聖道が得られる」（第三三経）という形で述べられている。涅槃の作証は「四念処を修習し多修せば、涅槃に趣向し涅槃に傾向し涅槃に臨入す」という形で、第五一経をはじめ多くの經典に説かれている。苦尽と涅槃は『長部』・『中部』の『念処経』と『念処相應』のいずれにも含まれているわけであるが、他の多くの經典にも四念処修習の目的として述べられており、原始仏教における四念処の性格を端的にあらわしていると言えよう。

このような性格をもつ四念処は、ある程度新古の前後関係を設定できる手がかりをもつ教理と結びつけて説かれている。

〔三〕（一乗道） 第一に一乗道（*ekāyano maggo*）と結びつけて説かれている形を取り上げてみたい。これには「この一乗道がある。有情の浄化のため、憂悲の超克のため、苦惱の滅のため、正理の証得のため、涅槃の作証のためであって、すなわち四念処がこれである」という定型句をあげることができる。この定型句は、『長部・念処経』や『中部・念処経』、『念処相應』の第一経、第一八経、第四三経に見出すことができる。特に第一八経と第四三経は、仏陀の成道を古い *geyya* の文学形式で伝えられている点特徴的

である。すなわち散文部に続く韻文の中で「生の辺尽を見、慈悲心あるものがこの一乗道を知る。この道によって、過去に暴流を渡った。〔未来にも〕渡るであろうし、〔現在も〕渡る」と説かれていゝる。ここには前半に散文部があり、後半に同じような内容をくり返して説く韻文部があり、その中間に「娑婆主梵天は、このように述べた。このように述べおわって、更に「その意を」次のごとく〔偈をもつ〕言われた」という、結合句で両者が結ばれている。韻文部が散文部に対して同じ内容を重ねて頌する（重頌）の関係にあることが示されている。これは九分教 *seyya* の特徴であると言われる（前田惠学『原始仏教聖典の成立史研究』二六七—二七八頁）。

*seyya* は九分教の一支として、仏教最古の聖典形式であり、この形式で仏陀の成道が伝えられている『念処相應』の二経は、最古の層に属する経典と見做すことができる。これはまた、四念処と結びつけて説かれている一乗道の成立の早さを示していると言えよう。

〔四〕（二灯明二掃依）第二に四念処が、自灯明自掃依・法灯明法掃依 (*atta-dipo attasaraṇo, dhamma-dipo dhamma-saraṇo*) と結びつけて説かれている形を見てみたい。これは『長部・大般涅槃經』に見出される。すなわち仏陀の般涅槃に際し「阿難よ、ここに比丘は身体に対し身体を觀察して住し、熱心にして正知正念にして世間の貪愛を調伏す。…受…心…法…。阿難よ、是の如く比丘は、自己を灯明とし自己に掃依し他に掃依することなく、また法を灯明とし法に掃依し他に掃依することなく住す」(DN. Vol. II, p. 100) と説かれている。これは『念処相應』でも同様に、仏陀の入滅後のよるべき教説として述べられている。四念処と二灯明二掃依との関係については、宇井伯寿博士がすでに「四念処について特に自灯明

四部・四阿含における四念処について（安藤）

自掃依法灯明法掃依がいはるるのは恐らく身受心法に自と法とが整ふて居るが為であろうが、本来いへば仏陀の教法の凡てについてこれがいわれ得るのであろう。法灯明法掃依の法は仏陀の教法を指すのが原意であろうと思ふから、その教法が灯明ともなり所依処ともなつて凡て比丘は修行道に進むが、其根本は自己 (*atta, attama*) を灯明とし所依処として自己の中に灯明所依処を見出すにある」(『印度哲学研究』第三、七〇頁) と、四念処が二灯明二掃依と結びつけて説かれている背景を論じられている。仏陀なき後の指針として自己の中に灯明所依処を見出すことをすすめるこの教説は、ある程度新しい層に属すると見ることができよう。

〔五〕（結び）『念処相應』に見られる四念処の教説は、前述したごとく四つの形と結びつけて説かれている。一乗道が説かれている経典には、仏陀の成道に關して九分教の一支である *seyya* の形式で伝えられているものもあり、四念処を説く形の中では、最古の形と見做すことができる。これに対し二灯明二掃依と結びつけて説かれている四念処は、仏陀の般涅槃に際して説かれており、新しい形と言うことができよう。②正念と③不善聚は、①一乗道④二灯明二掃依に比べて、その新古が必ずしもあきらかではないが、これらの中間に位置すると思われる。この両形は、仏陀の般涅槃およびそれ以後と關係して説かれていることはなく、仏陀の成道と直接結びつけて説かれていることもない。したがって①と④の中間に置くことは、一応妥当とされよう。いずれにしても②と③については、別の機会に改めて考察してみたいと思う。

（愛知学院大学図書館嘱託）